

第19回 ふるさと 見て歩き
しもひざわ 下檜沢の 歌舞伎舞台

市内では江戸時代後期から盛んに農村歌舞伎が行われました。現在でも西塩子をはじめとする、いくつかの地域に舞台道具が残っています。

◇幸四郎も乗った舞台！

下檜沢の舞台は明治時代に作られたと伝えられています。下檜沢の鎮守鹿島神社には六年に一度の大祭礼があり、その余興として舞台を組み立て、歌舞伎を演じていました。組み立てに使う木材や竹は近くの山から伐り出したもので、ほとんどは寄附でした。「ナガラ」という細い木材は各自が家で農作業などに使っているものを持ち寄り、一週間から十日間かけて組み立てます。



▲現在は美和の山村開発センターに保管されています

公演はたいいてい一日限りで、初めに三番叟、その後「仮名手本忠臣蔵」や「絵本太功記」など三、四幕の歌舞伎を上演しました。夕方近くに開演した歌舞伎は舞台上に明かりが灯り、夜遅くまで行われ近在の人々が酒やお弁当を持ってきて楽しんだそうです。

そして早々と翌日には解体され、木材や藪は競りにかけられました。昭和四年の地割（設営図）によると両側の棧敷を含めた最大間口は十八間、奥行きは二十七間あり、舞台上には襖を三段に設えることができかなり大掛かりなものでした。そのため鹿島神社の境内には設営ができず、神社近くの丹下河原に作ったそうです。

舞台の正面を飾る引き幕は現存していませんが、山方宿の大店桜屋呉服店



▲当時、舞台を設営した丹下河原（下檜沢）

が寄贈し、桜の大木が描かれた華やかなものだったといわれています。

このような下檜沢の人々の自慢の舞台には、なんと大歌舞伎の役者も乗ったのです。

昭和二十五年に水戸で八代目松本幸四郎や六代目中村芝翫ら大歌舞伎の面々による公演が行われた際には、舞台の大きさと襖などの道具の豊富さなどから下檜沢の舞台に白羽の矢が立つて貸し出されたそうです。一流の歌舞伎役者に演じてもらい、さぞ誇らしかったことでしょう。

舞台の運営は睦会という若衆が行っていました。水戸での大歌舞伎の公演にも戦争から復員した者など十二、三

人が舞台回しのため同行しました。戦前は地元鹿島神社の大祭礼での公演には、栃木県の飯野や益子から役者を呼んで来て行いましたが、そちらの人手も少なくなりましたことから、昭和十八年頃からは地元の睦会で役者もこなして数回の公演を行ったそうです。娯楽の少なかつた当時、ふるさとの祭はどんなにか楽しみだつたことでしょう。

◇舞台道具の現状

現在も襖絵三十三組（六枚一組）と燈籠、梯子などの大道具を含め、かなりの数の舞台道具が残っています。昭和三十年代に虫干しが行われなくなつてからは旧美和村がすべての道具を保管してきました。舞台蔵に保管していた際に、雨に濡れたり、虫害にあつたりして破損した道具は焼却処分してしまつたということで、現存するものは全体のおよそ三分の一ほどだといえます。その道具も残念ながら保存状況は良いとは言えません。しかし、ほとんどの襖は鮮やかな彩色を保っており、現在でも使用できる道具が多数あります。当時を知る人は、将来西塩子の舞台のように復活し、再び皆さんに見てもらいたいという希望を語ってくださいました。

※木村満氏、益子宏氏に聞き取り調査にご協力いただきました。

（歴史民俗資料館）